

ジャック・アタリ [2008] 『21世紀の歴史 未来の人類から見た世界』 作品社

評者：佐藤 政行

I はじめに ジャック・アタリと、代表作『21世紀の歴史』

ジャック・アタリは今更紹介するまでもないが、今日世界で最も注目されている国家政策家・経済学者・文学者・社会的企業家であり「ヨーロッパ最高の知性」「知の巨人」として知られている。

本書によると、アタリは1943年、アルジェリア生まれのフランス人であり、仏国立行政学院（ENA）卒業。彼は1981年、若干38歳の若さにてミッテラン大統領の大統領補佐官を務める。1991年にヨーロッパ復興開発銀行初代総裁を勤め、1998年にはNGOプラネットファイナンスを創設し、マイクロファイナンス（無担保小額融資）により、途上国の人々への社会的自立を促していることでも知られている。

なお、本書『21世紀の歴史』の原書はフランスにて2006年に出版され、我が国では2008年に出版されることとなるが、この本はフランスを始め、ヨーロッパにて翻訳され、ベストセラーとなる。そして、同著がサルコジ・フランス大統領の目にとまり、大統領の命を受けて発足した仏大統領諮問委員会、通称「アタリ政策委員会」を設置し、同委員長を務め、フランスやヨーロッパ全体復興の為の政策提言している。

そのような「ヨーロッパ最高の知性」ジャック・アタリと、名著『21世紀の歴史』を我が国国民にも知れ渡らせることとなったものが、2009年5月4日、5日と二夜連続にてNHK総合にて放送された「ジャック・アタリ緊急インタビュー」である。

アタリが世界から注目を集めたのは、2008年9月の米投資銀行リーマン・ブラザーズ破綻以降、本格化したアメリカ発の世界金融危機を、既に『21世紀の歴史』でもあるように少なくとも2年以上前から予見し、その洞察の鋭さからである。

そして金融危機後、フランスにて2008年に出版され、我が国でも2009年9月に出版された『金融危機後の世界』、こちらは金融危機が発生した原因を、アメリカ国内での中産階級への賃金の付与を怠り（結果、中産階級が自宅を持つための借金漬けになることを促し）、金融業者に著しいレント（超過利潤）を与え続け、優秀な人材も皆金融業界に集め、一部の人に過剰な富を集積させたアメリカ社会のアンバランスな構造が金融危機をもたらす根源となったことを『21世紀の歴史』の具体的内容版として痛烈に批判している。

そして、その状況と背景の根本をアタリは「ポジティブ・アティチュード（積極的な態度）」と称し、極めて社会に潜在的リスクから目を背け、そのような楽観志向「ポジティブ・シンキング」に警鐘を促している。そして、その根拠にもなった「新自由主義（ネオ・リベラリズム）」をもってして一部の人が著しい恩恵を被るという思想はもはや社会的支持が困難になってきているとアタリは考えている。その上で2部作目の『金融危機後の世界』でアタリは、この金融危機は経済恐慌に対する警鐘であるとし、ここで「資本主義を法制度の枠組みに囲い込み」世界的な意味での世界政府の統治機能の付与・強化と、世界的意味での国家的財政の健全化、毒入り証券の隔離、社会保障の強化で疾病や失業に対するリスク軽減の必要性などを促している。

いずれにしてもこのようなアタリによる金融危機2部作である『21世紀の歴史』『金融危機後の世界』の内、拙者はその中でも世界的な意味での世界的秩序のパラダイムの転換の意義を、人類の歴史を振り返りながら、壮大なスケールにて描きだしたアタリの代表作『21世紀の歴史』の書評を、今回、序文・第1章・第2章という「古代から現代までを振り返ること」を中心に概要・抜粋を取り上げ、それらについて書評をすることとした。

Ⅱ 本書の構成

本書は序文と付論を入れ、7章構成からなる。

- ・序文 21世紀の歴史を概観する
- ・第1章 人類が、市場を発明するまでの長い歴史

ジャック・アタリ[2008]『21世紀の歴史 未来の人類から見た世界』作品社

- ・ 第Ⅱ章 資本主義は、いかなる歴史を作ってきたのか？
- ・ 第Ⅲ章 アメリカ帝国の終焉
- ・ 第Ⅳ章 帝国を超える＜超帝国＞の出現—21世紀に押し寄せる第一波
- ・ 第Ⅴ章 戦争・紛争を超える＜超紛争＞の発生—21世紀に押し寄せる第二波
- ・ 第Ⅵ章 民主主義を超える＜超民主主義＞—21世紀に押し寄せる第三波
- ・ 付 論 フランスは、21世紀を生き残れるか？

Ⅲ 序文・1章・2章の要訳と抜粋

「序文 21世紀の歴史を概観する」

序文は、本書の概要をコンパクトに纏めたものとなっている。同書は2050年、2100年など50年、100年単位で21世紀に人類が向かう方向を敢えて予測し、見つめ直すことにより、未来の出来事に対する処方箋にしようとするものである。その為には人類の過去からの歴史を掘り起こして考えることをアタリは重要視し、その延長線上に未来を考えている。

そして現状の社会は市場の力が世界を覆っており、マネーの力が勝利したことは「個人主義が勝利したことの証」であり、近代史による激変の真実であるとしている。その上で世界唯一の法と化したマネーは＜超帝国＞、つまり市場があらゆる社会の頂点となり、それは新たな狂気や極度の富や貧困の元凶となる。超帝国では自然環境は食べ物とされ、軍隊・警察・裁判所を含めすべてが民営化される。また人類は人工器具を取り付けられ、自らが加工品となり、同じ加工品である消費者に向けて大量販売される。その結果、人類はこうした狂気にとらわれ、悲観的な未来にひるみ、暴力によってグローバル化を押しとどめようとするのならば、人類は対抗的な残虐行為や破滅的な戦いに陥ってしまう。この場合、今日では考えられない武器を使用し、国家、宗教団体、テロ組織、＜海賊＞が対立しあう。このような紛争状態を＜超紛争＞と呼び、＜超帝国＞同様に人類を滅亡に導く可能性があるという。

最後にグローバル化を拒否するのではなく、規制し市場の力をなくすのではなく市場の活動範囲を限定できるのであれば、また、＜市場民主主義

>が世界規模となり、一国による世界支配に終止符が打たれるのならば、自由・責任・尊厳・他者への尊敬などに関して新たな境地が開かれることとなり、それを<超民主主義>と呼んでいる。このためには、世界中の英知や新たな生活様式を動員し、人類一眼となり超民主主義を構築していく必要がある。

その上で、アタリは今後50年先の未来は予測できるとし、アメリカ帝国の世界支配（≡世界唯一の政治・経済・軍事などの超大国としてのアメリカ）は一時的なものであるとし、「2035年以前に終焉するだろう」と述べている。次に、世界の多極化、超帝国、超紛争、超民主主義という4つの未来が押し寄せてくるが、「超帝国」「超紛争」は世界に壊滅的被害を与える。そしてこの4つは時には重なって働き、現在も絡み合った状況が散見できる。彼は2060年ごろに超民主主義が勝利すると信じ、これは人類が組織する最大の形式となり「自由」は21世紀の最後の原動力となる力となると考えている。しかし、いかなる歴史も歴史とは多くの不条理の積み重なりであり、それが未来の予測を予測不可能にすると述べている。しかしながら、未来の状況は様々な方向に変化していくが、これを描写することは可能であり「人類への未来の羅針盤として」本書を執筆したのである。

1 「第Ⅰ章 人類が、市場を発明するまでの長い歴史」

第1章では、太古の昔から人類は、富・言語・領土・哲学、リーダーを中核において群れをなし、その中核には、祈りや農業予測や将来を司る「宗教人」、狩猟・防衛・征服を組織する「軍人」、物を生産し資金繰りを工夫しその成果を商業化する「商人」という三つの権力構造による夫々、富を支配する主体が歴史と共に移り変わるが、基本的に人類においてこの三者が権力の中枢を司る存在として人類が発展していつていることを述べている。

そして、アタリは、人類の長い歴史の大半は<ノマド>として世界中を旅していたという観点に着目する。

2 「第Ⅱ章 資本主義は、いかなる歴史を作ってきたのか？」

第Ⅱ章は14節に別れて書かれており、アタリは未来を見通すには、まず

過去の重要な出来事を知るべきだという。

第1節 <市場民主主義>の誕生—紀元前一二世紀

紀元前12世紀、ペルシャ帝国などの隙間にあたる地中海沿岸地域にて最初の市場と民主主義が誕生し、これらは2000年後に<市場の秩序>を形成する。それは最初、帝国内部で寄生する形で生まれ、この別な形の社会統治の論理は、人間の基本的な人権を理想に掲げる「個人主義の秩序」を重んじていることが背景にあり、何度も人類は自らの手でそれを裏切りながら、しかし多くの富を形成してきた。この秩序は、帝国などと競合し、商人たちは全ての王にとってかわった。市場の秩序は勢力拡大し、効率的な技術により、暴力や不正が横たわろうとも、市場と民主主義を根付かせていった<市場民主主義>。市場の秩序は自由の主体を個に与え、そのことの勝利を意味し、その秩序は何世紀にもわたり、常に準備をしたものがそれを洗練させ続けているのである。

第2節 「自由」こそ究極の目的—古代ユダヤ・ギリシアの理想

ここでは紀元前1200年ころから地中海地域にて始まった人々の自由への希求が、それまで武力・軍人にて統治されてきた「帝国」を打ち破り、代わってヨーロッパやアフリカ、中近東にかけて、キリスト教やイスラム教を背景とした「宗教者による統治による帝国」や、西欧では西ローマ帝国崩壊により自治権が掌握されていく歴史を紀元800年頃までの約2000年近い歴史の変動をダイナミックに纏め上げ地球的規模にて壮大にアタリは描き出している。

その上でアタリはユダヤ—ギリシア思想を以下のように述べている（同著P.47）。

ユダヤ—ギリシアの理想とは、自由こそが究極の目的であり、また道徳規範の遵守ともなり、生存条件でさえあることを明確にした。富とは神の恵みであり、貧困は脅威であった。この時点から個人の自由と市場の秩序は不可分なものとなる。この傾向は現在の我々の時代にまでさらに進化していく。

紀元前500-400年代、時代はめまぐるしく変わり、アテネでは「個人主義の原則」が明確にされ、この傾向はその後の史実にはっきりと現われてくる。紀元前594年、ソロンがアテネで史上初の民主憲法を制定した。

一方、中国の賢人 老子は、幸せは無為にあり、「唯一、真の自由とは、自らの欲望に惑わされないことだ」と述べた。しばらくし、中国では孔子が「幸せとは、礼儀、家族、伝統、上下関係、目上の者に対する尊敬を必要とする」という教えを広めた。そのことについて、アタリは「これは歴史の大きな転換点であり、この傾向はその後も脈々と続き、現代の我々にも大きな痕跡を残している。」(同著P.49)と評し、以下のように述べている。

アジアでは、自らの欲望から自由になることを望む一方で、西洋では、欲望を実現するための自由を手に入れることを望んだのである。言い換えれば、世界を幻想と捉えることを選択するか、世界を行動と幸福を実現する唯一の場であると捉えるかの選択である。すなわち、魂の輪廻転生か、それとも魂の救済かという選択である。

紀元前444年、アテネリーダー ペリクリスは、ギリシャの首都を軍事面・経済面・文化面で巨大権力に仕立て上げ、ギリシャでは、彫刻、詩、劇、哲学、民主主義といった理想が開花した。しかし、紀元前420年、スパルタとの不条理な戦いは、西側の隣国マケドニアのフィリップ王に勝利をもたらせた。ここでアタリが普遍的な歴史の教訓を述べている(同著P.50)。

巨大勢力がライバルに攻撃されると、勝利するのは、しばしば第三者である。さらにもう一つ。勝者は、しばしば、打ち負かした側の文化に傾倒する。最後にもう一つ。世界の権力は、おもな富が東側に残っていたとしても、西に向けて移動していく。

フィリップ王がペロポネソス半島掌握後、彼の息子アレクサンダーはインドに攻め込み、紀元前323年インドを離れ、ペルシャの首都に戻り死ぬ。彼の帝国はギリシャ、ペルシャ、エジプトに分裂し、ギリシャは時代から

取り残された。

西側ではローマがアテネと戦火を交えることもなく、その後継地となった。

紀元前27年、ローマ最盛期を誇ったカエサル死後、後継者のオクタ비아ヌスが初代皇帝アウグストゥスとなった。後継者たちは国境付近の反乱を抑え込もうと、エジプトの反乱を鎮圧し、反逆派を一掃した。そのなかには紀元30年のイエス・キリストというエルサレムのラビ（ユダヤ教の宗教指導者）が含まれていた。その後、他のユダヤ人も反逆したが、紀元70年エルサレムは破壊され、ユダヤ人全員抹殺された。「キリスト教の誕生」である。

紀元48年、エルサレムで初の宗教会議が開かれ、キリスト教徒（最初はユダヤ人と敵対するローマ人と同盟を組んだが、次第にユダヤ人同様に嫌われることになる）は、ユダヤ教のメッセージを、イエス・キリストのもとに人々は集まるといふメッセージに変え、これを異教徒に流布。なぜならば、予定されていた救世主がこの世に現れ、ユダヤ人たちは存在意義を失い、改宗されることを余儀なくされたのである。キリスト教徒は選ばれた人々であり、貧困・非暴力だけが救いの道であると説いた。また、愛（アガペー）は永遠への条件であり、富の創造は進歩ではなく重要性をもたないと説いた。こうして、ユダヤーギリシャの理想が、大幅に見直されることとなった。そして、アタリは未来への教訓を以下のように残している（同著P.53）

宗教の教義は、たとえどれほど影響力があったとしても、個人の自由の歩みを遅らせることには成功しなかった。実際に、宗教であろうが宗教から独立した権力であろうが、現在までにいかなる権力も、この歩みを持続的に押し止めることはできなかった。

ローマはその富や温暖な気候を目指してやってくる部族に悩まされ続けた。こうしてローマの国境警備費用は徐々に膨大な額となり、後退、疲弊した。395年、ローマ帝国はビザンティン帝国（≒東ローマ帝国）と西ローマ帝国と分割統治された。

476年、最後の西ローマ帝国は西ゴート族に敗れ滅亡した。一方、東ローマ帝国はなんとか存続し、反対に西ヨーロッパでは、司教、君主、大きな村が小さいながらも自治権を組織していった。この時期、世界中では帝国はますます脆弱となり、管理不能に陥った。

622年、アラビアの預言者ムハンマドが神の啓示を受け、コーランとし、「イスラム教」が始まった。100年後、キリスト教同様、古い帝国を崩し去り、新たな帝国というより遊牧民族に近いものを作り出した。イスラム教は、これまでの帝国の社会制度より効率的で簡素な社会制度であり、これまで帝国が蓄積した知識と富を利用した。

第3節 市場、都市、そして国家の形成—四〜一二世紀

四世紀、旧西ローマ帝国北部にて、市場をもったイスラム教の中継点となるキリスト教の都市がはじめて誕生した（国家の萌芽）。800年、西ローマ帝国は現実的体裁を整えたゲルマン系国家となり、隣国には2つの国家（フランス、ロシア）が組織された。

当時、地中海では、イスラム教がまだ市場の秩序の最先端に位置してきた。カリフの首都であり、ヨーロッパ最大の都市であったイベリア半島のコルドバでは、アラビア語・ギリシャ語・ラテン語が飛び交い、世界から富が集中していた。コルドバにあるカリフの図書館は、他のヨーロッパ全土の蔵書を足した以上の本を所蔵していた。

もう一つの巨大帝国 中国は、アジア全海域を支配し、舵・羅針盤を所有していた中国は、ヨーロッパ向け交易を管理していた。

12世紀中頃、地中海ではイスラムが未だ最大勢力であった。イベリアからからリビアまで拡大したイスラム教帝国首都コルドバには、銀行家、詩人、学者、商人等、卓越したクリエイターたちが存在していた。

1148年、コルドバの支配者についてモロッコ南部からやって来たアルモハード朝（ムワッヒド朝）の信徒たちは、イスラム教徒にギリシャ哲学の勉強を禁じ、キリスト教徒を追放した。同時期、イスラム教リーダーは十字軍に占拠された聖地の奪回目指して出発した。この出来事をアタリは世界の中心がイスラムからヨーロッパに移った「歴史的分水嶺」として高く評価している。その理由を、当時二大帝国であったイスラムと中国は「科

学への閉鎖性」と「市場の秩序、競争に対し背を向けたからである」と考えている。

第4節 歴史を動かす鍵「中心都市」とは？

これまで部族、王国、帝国は神々を崇めたり戦争したりして共存してきたが、市場の秩序においてはマネーが唯一の言語となる。そしてアタリは市場の秩序は「(市場の) 中心都市」と「(中心都市の) 周辺都市」とにわかれ、中心都市にはクリエイター階級が集まり、周辺都市は保守化し中心都市への人・物などの供給主体となり、中心都市が革新的である一方、周辺都市は保守的になる傾向があるという。ここには今日我々の住む都市、国、地域の繁栄のヒントが隠されているといえよう。市場の中心都市についてアタリは以下のようにその特色を述べている(同著PP.61 - 64)。

これまで市場の秩序は、常に一つの拠点を<中心都市>と定めて組織されてきた。そこには<クリエイター階級>(海運業者、起業家、商人、技術者、金融業者)が集まり、新しさや発見に対する情熱があふれていた。この「中心都市」は、経済危機や戦争が勃発することにより他の場所へ移動する。

このことは市場と民主主義という新たな秩序によっても説明できる。この新たな秩序は競争原理に基づいており、斬新さに対する要求やエリートの選抜をうながしてきた。さらに企業や家族という存在は非常にはないものであることから、企業や家族が超長期的に資本蓄積を行うことはできない。つまり、都市が資本蓄積を行うのであり、この「中心都市」こそが、資本主義の中核となり、これを組織していくのである。最後に、競争とは戦いを前提としていることから、市場、民主主義、暴力の間には、連続性が存在する。

「中心都市」は、自らを破壊しかねない欠乏状態に対応しなければならぬことから、他の都市に対抗するための積極的な戦略を駆使していく。例えば、他の都市の模倣、緊縮財政、軍事力、統制経済、保護貿易、関税制度などは、彼らの武器である。クリエイター階級がある都市において他の場所よりも新たなサービスを産業製品に変える手段を統合でき

ると、この都市は「中心都市」になる。そして、資本管理、価格決定、利潤蓄積、労働者の管理、軍事強化、冒険家への財政支援、政権強化のためのイデオロギーの流布といったことが必要となる。

さらには、都市内外において、もっとも効率的なエネルギー資源の管理や、もっとも迅速なコミュニケーション手段を確保する必要がある。また「中心都市」では、銀行家、芸術家、知識人、技術革新をもたらす人材が招かれ、資本を確保し、宮殿や墓を建造し、世界の新たな指導者の肖像画を描き、軍事施設を管理していく。

この「中心都市」の周辺には、衰退あるいは拡大していく、過去の、そして未来のライバル都市がある。こうした王国や帝国といった他の「周辺地域」は、自国の一次産品や労働力（一般的に奴隷であるが）を「中心都市」に供与することによって<周辺都市>となる。ちなみに、こうした「周辺都市」を支配しているのは、部分的に宗教や軍事力といったこれまでの秩序である。

市場の形式は、「中心都市」が「中心」や「周辺」を管理するための十分な富を寄せ集めることができる間は継続する。しかし、都市内部の平和維持や都市外部の敵からの攻撃を防ぐために、莫大な資源の抛出を強いられたときには息切れを起こすことになる。

これまでにさまざまな形式の「中心都市」が誕生したが、いずれの都市も過剰な出費により衰退し、競争相手となった都市にその座を譲ってきた。一般的に、次の「中心都市」となる都市は、「中心都市」に攻撃を仕掛けた都市ではなく、この戦いの間に、これまでとは違った文化・成長原理をもった都市であり、これまでとは違ったクリエイター階級が、新たな自由・資金・エネルギー・情報源を持ち込んで、従来のサービスを新たな大量生産の製品に置き換えた都市である。

「中心都市」の形式が移り変わるたびに、まずは農産物が、次に工芸品が産業化され、奴隷制度が衰退し、賃金労働が発展してきた。また、エネルギー生産や情報伝達手段が自動化され、技術者、商人、銀行家、海運業者、軍人、芸術家、知識人も「中心都市」へと移動する。そこで個人・市場・民主主義の自由の領域は拡大するが、独立した農民・職人・自営業者は不安定な賃金労働者と化す。つまり、富が限られた人々

の手中に集約され、消費者と市民は大きな自由を手に入れる一方で、労働者はきわめて疎外される。

皮肉な出来事として、こうして帝国の秩序から市場の秩序への急変は、人々をノマドへと回帰させた。(中略) 現在、この放浪生活がよみがえったのである。

現在まで市場の秩序は、九つの市場形式をたどってきた。では、この変遷を「中心都市」の推移を順に追って考察するか(ブルージュ、ヴェネチア、アントワープ、ジェノヴァ、アムステルダム、ロンドン、ボストン、ニューヨーク、ロスアンジェルズ)(中略)を順に追って考察することも可能であろう。

第5節 資本主義が世界で産声をあげた—ブルージュ／—二〇〇年～一三五〇年

以後、第5節～第13節まで年代を追い(市場の)中心都市を記載している。ここでは史上初の(市場の)中心都市となったブルージュ(1200～1350年)の紹介がなされる。ブルージュは広い農業後背地に恵まれた大きな村にすぎなかったが、ブルージュの港を使い商人たちはヨーロッパ全域や、一部の商人たちはインドにまで足を伸ばした。中心都市ブルージュの回りは「中心地域」であるハンザ同盟のドイツ、フランス、イタリアの農産物市場である。

第6節 アジアと通じるものが世界を制す—ヴェネチア／—三五〇～一五〇〇年

次に1350～1500年まで市場の中心都市はヴェネチアである。ヴェネチアは東洋の製品を北ヨーロッパに繋ぐ要所となり、ヨーロッパを襲ったペストの流行によりブルージュが突如没落すると、その地位はヴェネチアに移り、東洋とヨーロッパの貿易を支配した。しかしヴェネチアが中心都市の地位から没落したのは、職業別ギルドが硬直化し、軍備や通商路の確保も欠如し、社会組織全体が「高コスト体質」に悩まされたからである。その後、史上三番目の「中心都市」はフィレンツェではなかったが理由は「フィレンツェには港がなかったから」である。

第7節 印刷技術が世界を変革する—アントワープ／一五〇〇年～一五六〇年

1500～1560年、アントワープ（現 ベルギー北部の都市）の時代がやってくる。アントワープはヨーロッパ各地の商品 布地・塩・刃物・ガラス細工・貴金属と、東洋の製品を集める役割を担っていた。1450年頃、アントワープの人口は2万人程であったが、ヨーロッパ北部の製品を、ポルトガルやスペインがアジアから運んでくる香辛料などと交換する主要な場所となった。アントワープの株式市場は、保険、賭博、くじの分野でヨーロッパ最大の金融中心地となり、外国貿易をファイナンスするために銀貨「グロ」を使用する銀行ネットワークが築かれた。アントワープは軍事能力を持っていなかったが、「中心都市」として金融市場を管理運営する能力をもっていた。しかし、この都市も「中心都市」から没落する。前の2つと同様に、アントワープはそのネットワークを維持する財力を失った。理由は、アメリカ大陸で大量の銀を採掘したことによる銀の暴落により、銀貨の価値が下落したことと、海軍力をもたないが故、宗教戦争によりオランダとスペイン間の海路が断たれ、ヨーロッパ北部にアメリカ大陸の銀が出回らなくなった。またセヴィリアで勃発した金融危機に巻き込まれ1550年にその幕を閉じた。

第8節 投機という芸術が世界を席卷する—ジェノヴァ／一五六〇年～一六二〇年

1560～1620年、ジェノヴァが中心都市としての役割を引き受ける。彼らは商業と金融業に専念した。14世紀、ロンバルディア人の一部は教会が金融業をビジネスマンに就くことを許可した後、銀行家となり利息をとまなう金銭消費貸借を促した。彼らはヨーロッパのほとんどの王族や商業や、フィレンツェの繊維産業に資金を貸し付けた。またパティーニとマッサリが「複式簿記」を開発し、経済と哲学の秩序に革命を起こした。なぜならば会計簿記は、投資する際のリスクを測る目安とされ、「未来を予測」を可能とした。またジェノヴァは他地域同様、多くの「クリエーター階級」が集まってきた。ジェノヴァは「スペインの支配にあった」16世紀初頭から頭角を現し、1560年頃から「中心都市」となりジェノヴァの銀行は金市

場を支配し、通貨為替相場を決定し、ヨーロッパ王族達の事業資金を貸し付けた。またジェノヴァは羊毛や金属工業など巨大な工業をもった。

しかし、意外なところに没落の穴はあった。1588年スペイン無敵艦隊がイギリス船に敗れ、大西洋貿易は、ジェノヴァ、オランダ、イギリス、フランスをはじめとする商業船による交易が復活する。

この頃、東洋では1598年、中国は朝鮮半島に侵出してきた日本軍 豊臣秀吉の文禄・慶長の役を破ったが朝鮮を占領することはなかった。その後、中国と日本は日清戦争、日中戦争と数度衝突するがこれは両国の関係ルールを取り決めた。他方、ジェノヴァは多方面の競争に勝つための十分な人的・金融的資源を確保できなくなり衰退しはじめ、また軍隊ももっていないことからオランダも抑え込むことができず、オランダに大西洋ルート支配を許し、アメリカ大陸の金銀を支配し、オランダに大量に流れ込んだ。そしてジェノヴァはアントワープ同様、スペイン発の新たな経済不況により弱体化していき、地中海沿岸地域は永久に中心都市から遠ざかる結果となった。1620年頃ジェノヴァは表舞台から姿を消し、直後、アムステルダムが伸び上がる。地中海は「二次的な海」と成り下がり、スペイン・イタリア・フランス南部は衰退を余儀なくされた。一方のオランダは大きく前進し、ネーデルランド連邦共和国の生活水準は、ジェノヴァやヴェネチアを追い越し、フランス、スペイン、イギリスの「5倍も」豊かになった。

第9節 洗練された船が世界をつなぐ—アムステルダム／一六二〇年～一七八八年

こうして中心都市となったアムステルダムは、ネットワークを再構築した。まずアムステルダムは食糧を輸入する為の財源を確保するために、後背地において農作物を栽培し、羊を飼育して染色産業と紡績の機械化を進め、食糧産業と衣料産業の産業化を実現した。そしてヨーロッパ中の毛織物が染色の為、アムステルダムに集まった。こうして集まった余剰金を元手に「造船業」を産業化し、フリユートと呼ばれた大量生産可能で乗組員1/5の船を作り出すことに成功した。そして巨大な海運力を手に入れたオランダは、他のヨーロッパの6倍の商品を運び、穀物・塩・木材はヨーロッパの3/4、金属・繊維は約半分を運んだ。そしてオランダ東インド会

社、アムステルダム証券市場、銀行は航海で蓄えた富を金融・商業・産業支配へ投資した。この「中心都市」はアムステルダムだけではなく、ネーデルラント地域全体が対象となった。この頃オランダのプロテスタント教会は富に対する罪悪感を払拭し、公的生活は豪勢となり、知的生活は盛んになった。知識社会はアイデアを交換し、有名大学は外国人を受け入れた。

そして世界の状況は様変わりし、ブルージュは二次的都市にすぎず、アントワープはアムステルダムの郊外となり、ジェノヴァは衰退し主要な商業流通経路から外れ出し、ヴェネチアは東洋貿易の中継点にすぎなくなった。

しかしながら1775年頃、オランダの君臨に限りが見え始めた。理由は「オランダ海軍戦力の低下であり、海上安全コストの高騰」である。更に使用エネルギー源の木材が枯渇し、海軍の技術進歩が止まったこともある。そして、「賃金労働者の要求」が強まり、社会紛争が激化し、アムステルダムの毛織物が「コスト高に陥った為」である。そしてヨーロッパ中に資本家層が自由を求め、そしてナショナリズムが発展した。その頃、ヨーロッパの空腹の市民は不満がたまり、一触即発状態であった。そして、オランダの最も優秀な金融業者や海運業者はオランダを離れ、最も確実に活気あふれるロンドンへと移住した。そして「金融危機」が中心都市にとどめを刺し、1788年、オランダの銀行がフランス革命前夜に倒産した。こうして資本主義の中心都市はロンドンへと移っていき、ロンドンは「民主主義と市場が同時に発展する」ことになる。

第10節 蒸気機関という動力が世界を動かすーロンドン／一七八八年～一八九〇年

16世紀より羊毛の加工技術を習得していたイギリスは、インドの綿発見と、エネルギー源としての河川があったことで綿紡績の機械化が進んだ。イギリスは重要な一次産品掌握するためイギリス東インド会社を使い、インド、北アメリカ、南アジアを支配し、植民地から一次産品を廉価で輸入し、これらを加工し、高値で植民地に引き取らせた。

1689年、ロンドンで名誉革命が起り近代民主主義の誕生を促した。議

会は法案の自由を保障し、議会は、王が軍を動員し戦争行うことを認可し、イギリスは史上初の〈市場民主主義〉の国となった。

18世紀、大英帝国の富は増え、イギリスの貿易額は10倍に、国民所得に占める輸出の割合は3倍に拡大した。イギリスは余剰利益を自国産業の近代化に充当した。こうして新たなクリエイター階級が育ち、産業階級が発展した。イギリス商人は国際的権力掌握に極めて積極的であった。1734年イギリス人時計職人ジョン・ハリソンが最初のクロノメーターと呼ばれる海洋上で正確に時間を測る時計を開発し、航海距離短縮につながった。イギリスはクロノメーターのおかげで外洋を支配し世界で組織的収奪を行った。またイギリスはオランダとの戦いに打ち勝ち、全海域の制海権を握り150年前オランダがスペインから奪い取ったアメリカ大陸貴金属貿易の権利もイギリスのものとなった。

イギリスの人口はフランスの1/3であり、イギリス一人当たりの所得はフランスの半分、オランダの1/5であったが、イギリスはフランスと同規模の海軍を保有した。

しかし、1790年から1810年までの20年間、ヨーロッパは戦火が広がったことから、ロンドンが世界の権力を得た。これまでのようにある国とよその国とが転覆を狙っている間に第三国であったロンドンが市場の中心都市を掌握することに成功した。

しかしイギリスは産業の発展により、オランダ同様木材不足に陥り、エネルギー不足にも見舞われていたが、ジェントリー階級（準貴族階級）は、フランス人物理学者が発明した蒸気機関を、木材資源豊富なフランスはこの技術革新を見過ごし、それをイギリス人ジェームズ・ワットが蒸気機関の特許権を取得したことにより、イギリスで石炭採掘がはじまり、1785年にはエドモント・カーライトが発明した力織機の動力源となった。綿貿易の生産性は10倍に向上し、まさに機械化が宣告された。

そして1789年からフランス革命により、ヨーロッパ全土は王・皇帝から自由となった一方で、フランスにいた数少ない商人たちはフランスから逃げ出し、1799年にヴェネチア最後の総督がナポレオンの命により退任させられ、フランスの優秀な金融業者はロンドンに拠点を移した。

やがてナポレオン戦争終焉により、イギリス製品が大陸ヨーロッパに出

回るようになった。ロンドンは大都市となり、イギリスの人口の1/4が集まった。1835年、フランクフルトからロンドンにやってきたロスチャイルド家の銀行（初の多国籍銀行）は各国市場を巧みに操り、ヨーロッパ人の預金を基にして、イギリスの製鉄業、鉄道業、金属船などファイナンスし1812年ロンドン近郊で初の銀行が開通した。1825年、イギリスは工業のGDPが農業GDPを上回り、人類初の大転換をした。

「中心都市」の効率性は、イギリスの租税が1820年前は1/3であったのに、1860年には1/10にまで低減した。

そして民主主義は市場とともに進化した。欧米では選挙権もつ資産家たちが少しずつ増え始めた。ここでアタリによる未来への教訓「専制的な国家は市場を作り出し、次に市場が国家を作り出す。」(同著P.98)。市場の中心都市は政治的・軍事的に支配的な帝国の中心地となった。オランダは衰退し、フランス・ドイツ・アメリカは中心と周辺の間中に位置することとなった。1857年、イギリス軍は東インド会社に代わりインドを直接支配し、1860年、イギリス軍は阿片を中国に販売し混乱に陥れ、香港を手に入れ、譲歩も引き出した。その8年後、中国と同じ運命をたどることを恐れた日本は、西洋を見習って明治維新を断行し、農奴を一気に賃金労働者に変革した。

一方、その頃ロンドンには、小説家のディケンズ、大英図書館で『資本論』執筆するカール・マルクス、進化論のダーウィン、画家のターナーといった、革新的な技術者、産業家、輸出業者、金融業者、知識人、一流の芸術家などの「クリエーター階級」が集まってきた。

しかしロンドンもその地位を揺るがす出来事が起き始める。アメリカは南北戦争・奴隷解放により綿花が高騰した。1790年に世界の金融中心地であったロンドンもアメリカで銀行業が行われはじめ、その地位が危うくなる。ポンドもドルに脅かされた。イギリスの金融業界はその地位を保つために投機行為により収益性を保たねばいけなくなった。

1880年からは、プロシア王国、フランス、アメリカなどの追い上げにあり、先端技術の大きな発見につられ、ロンドンには株式投機バブルに突入し、1882年にはロンドン・シティで銀行の倒産が相次いだ。ここでアタリによる未来への教訓「金融の中心地としての破綻は、「中心都市」の終焉を告

げる」。やがて「中心都市」は大航海時代の動きにならい、海を渡り、ボストンへと移っていった。

第11節 内燃機関が世界を小さくした—ボストン／—一八九〇年～一九二九年

ロンドンでは蒸気機関が圧倒的勝利を収めた。新たなエネルギー源（石油）、新たな動力（内燃機関）、新たな工業製品（自動車）により、アメリカ東海岸の都市ボストンへと市場の中心都市が移っていった。

エネルギー・情報伝達手段の変化は社会の変化をもたらしたが、こうしたものは、私的利用目的の為に使われる大量生産される工業製品であり、これらが馬車・鉄道にとってかわった。

ヨーロッパでは自動車を馬車に代る移動手段とみなしたのに対し、アメリカの入植者たちは国内移動時間削減にとりつかれた「超個人主義者」であったことから、列車による移動に我慢ならなかった。彼らは起業家精神に富み、自動車を大量生産する資質を兼ね備えていた。またアメリカは職人芸の伝統がないことが幸いし、大量生産に必要なベルトコンベアによる流れ作業を、アメリカ人は容易に受け入れることができた。

ボストンはこうしたアメリカ資本主義初の「中心都市」となる。アメリカの発展は、市場の秩序と歴史を完全に合致した。というのは、アメリカは市場の秩序が要求する機動性に対し、彼らは定住民としての過去がないから、市場の秩序は常に拡大したのである。

またアメリカでは社会闘争により労働者階級の賃金が上昇し、生活必需品・食材・衣類を購入できるようになり、それが自動車産業の顧客を育成し、資本家たちを肥やした。

一方、ヨーロッパでは1914年からの第一次世界大戦の勃発、スペイン風邪の流行、ロシア革命、ドイツ共産革命が終結したときには、世界の権力はアメリカに移っていた。ここで歴史の教訓。「戦争の勝利者になる国とは、常に参戦しなかった国、または、いずれにしても自国領土で戦わなかった国である。」（同著P.105）

ヨーロッパが疲弊したことにより、アメリカ東海岸地域に権力が据えられ、アメリカの自動車産業はこの戦争により強化され、勝利を収めた。

しかしそんなアメリカでも生産コストと労働賃金が上昇し、収益性に限りをもたらされ、未来へのヴィジョンが曇ったことで、需要は激減し、投資が滞り、失業が蔓延し、保護主義に陥った。またこれに1928年大手石油会社7社「セブン・シスターズ」がカルテルにより石油価格が上昇し、これにより消費が冷え込み、大量消費前提による大量生産の自動車産業が崩壊し、「大恐慌」の引き金が引かれた。こうして7番目の市場の中心都市「ボストン」の栄華に限りが見え、8番目の市場の中心都市が飛躍し始める。

第12節 そして電気が、世界に革命をもたらした—ニューヨーク／一九二九年～一九八〇年

1889年のニコラ・テラスの発明である小型電気動力（モーター）は機械の生産性向上を果たした。トーマス・エジソンのおかげで電気照明は二次的用途となり、19世紀末アメリカ主要都市では照明が完備され、より安全となった。次いで電気動力によるエレベーターが登場し、高層ビル建設が可能となり、都市への人口流入と核家族化を促した。また電気の動力はアパートでも使用できる電化製品の市場を生み出した。また家事労働（掃除、保存、料理、娯楽）は次第に大量生産製品（浴槽、洗面台、食器洗い機、冷蔵庫、レンジ、ラジオ、テレビ）となった。

アメリカには地方の伝統がないことが幸いし、大都市化して変革することは容易であった。

そしてアメリカはドイツにより仕掛けられた2度目の戦争（第二次世界大戦）で自国領土の損害をまたしても免れ、ニューヨークを拠点として工業や金融に必要な技術や生産力を強化した。今回もまたエネルギーがカギとなり、ヒトラーは石油確保の為、独ソ不可侵条約が破綻すると、コーササス地方の油田奪取の為、レニングラードに侵攻した。1941年12月に日本が真珠湾攻撃も、石油資源の禁輸措置がその理由であった。最後に、ルーズヴェルト大統領がイギリスから「黒い金」（石油）の世界最大の埋蔵量を誇るサウジアラビアを継承したのは、1945年2月のヤルタ会談を終えた後であった。

第2次大戦後、世界は二分され、世界の半分はソヴィエト連邦中心とし

た共産主義の秩序に加わった。「冷戦」の始まりである。

今回の新たな市場の中心都市の形式は、ニューヨークと電気を中心として始まった。家庭の電化、家族手当、住宅手当は1945年から家電製品に対する大きな需要を喚起し、大型公共事業よりも、より効率的に世界経済を喚起した。

アメリカでは最貧民層がゲッター（黒人スラム）で反乱を起こす一方、中間層は貯蓄に勤しんだ。彼らは銀行、保険、広告、マーケティング、メディアといった職業の数が増えた。1954年～1973年までの間に、アメリカ世帯の貯蓄残高は5倍に膨らんだ。アメリカ以外の世界は中心都市に対する「周辺地域」となった。けれども今回もまた「中心都市」は、外国での軍事費や自国のゲッターでの警備費が嵩み疲弊した。

朝鮮戦争後、ベトナム戦争により、資本主義大国アメリカの軍事上の失策・財政上の脆弱が露呈した。西側全体で官民のサービスの自動化をできず、産業の利益を侵食した。アメリカの鉄鋼業界は日本や韓国のライバルとの競合に必要な投資額の半分しか行われなかった。

1980年代、アメリカは瀬戸際まで追い込まれたように見えた。アメリカは自動車輸出首位の座を明け渡し、工作機械の国際シェアも著しく低下した。アメリカの対外債務は巨額に膨れ上がり対外資産を上回り、これを上回るため外国人債権者によるドルの大幅な使用を容認し、ニューヨークだけが世界の金融市場を取り仕切る場所ではなくなった。日本はアメリカの最大の債権国となり、アメリカを象徴する企業や不動産を買いあさり、アメリカは繁栄する日本の穀倉地帯にすぎない存在になりさがるかにみえた。

こうしてアタリを含む多くの人々が、東京が市場の中心都市になるのではないかと考えた。当時の日本には金融力があり、経済も統制されていたが、実際には日本は銀行・金融システムに構造問題を解決する能力がなく、金融バブルを制御する能力もなかった。また円の大幅な切り上げ回避や労働市場の流動化も図れず、ホワイトカラーの生産性を高めることもできず、世界中のエリートを自国に引き寄せることもできなかった。そして、市場の中心主義に求められる「個人主義」の推進することなく、アメリカの呪縛からも逃れられなかった。

こうして、カリフォルニアにおいて大企業の事務処理の大幅な事務処理軽減を実現した。まさにこの時、問題となっていたことであった。

第13節 <オブジェ・ノマド>は、世界をどう変えるのか？—ロスアンジェルス／一九八〇年～？

今現在、9番目の市場の中心都市はカリフォルニアであるが、ここではクリエイター階級が技術革新により一般大衆の商業市場を作り上げるために必要な社会的・文化的・金融的基盤を築き上げた。

カリフォルニアはイタリアと同規模のサイズであり、そこにアメリカの1/8、3500万人の人々が住み、1980年から新たな中心都市となった。カリフォルニアは金鉱山が発見され、石油・映画産業発祥の地であった。またアメリカで最も野心的な人々が集まり、電子産業・航空機製造産業が集まり、世界でも有数の大学施設や研究施設がある。娯楽産業の大物や優秀な音楽家たち、ITの発明家たちもこの地に集結している。

1971年ゴードン・ムーアにより設立されたインテルにより数10億の情報蓄積・処理を集積したマイクロプロセッサが製品化された。これによりコンピュータの量産が可能となった。1973年から企業はコンピュータを使用するようになり、製造業・サービス業の生産性を著しく向上させる「オフィス・オートメーション(OA)」が始まった。

こうしてビジネス・行政コストは削減され、テクノロジーは金融サービスを産業化させた。こうした技術は金融技術の発達を促し、こうして金融と保険は産業となった。中心都市が権力を集中できるのはサービスの産業化によってであり、今回は「金融と行政の産業化」によるものである。

こうしてカリフォルニアは新たな消費財を市場に提供し、<オブジェ・ノマド>である小型高速情報記録・処理・伝達装置が登場した。

これがノマドという理由は、ノマドは携帯可能なオブジェを常に愛するからである。それは尖った石やお守りに始まり、武器、宝石、楽器、紙であった。更にノマドにとって初の大量生産のオブジェとなる書物が登場。次に定住民のオブジェを小型化し腕時計、カメラ、ラジオ、ビデオ等が登場しついに情報処理オブジェが登場したのである。

そして1981年IBMはパーソナル・コンピュータ「IBM5150」を商品化し、

西海岸の小さな会社マイクロソフト社製「MS-DOS」を搭載したものが100万台販売という大成功となる。10年後にマイクロソフト社は世界のトップ企業ベスト5に入る。2006年には、2億5000万台コンピュータが販売され、世界中で10億台の小型コンピュータが稼働している。

同時期、携帯電話とインターネットというノマドの為のすごい道具が登場した。携帯電話とインターネットの普及は両者を接続することでこの2つは爆発的に普及した。定住民には旅行の代わりとなる一方、ノマドはお互いに連絡取り合う手段となり、各自が領土と関係ないアドレス（携帯電話の番号またはEメール・アドレス）取得が可能となった。

そしてアメリカ経済の重心及び人口の移動は、東北から南西に向かい、2006年にカリフォルニア州は、GDPの観点からアメリカ最大の州となった。

こうしてアメリカは地球上で前代未聞の最大勢力となり、ネットワークを組織して、分析し、相手を取り込み説得するための影響力を及ぼすためのデータベースを構築した。そして世界経済の成長も加速し、市場の秩序は新たな市場民主主義社会とともに広がった。そして1985年以降、ソヴィエト・システム（共産主義体制）が揺るぎはじめ、その後体制転換を余儀なくされた。つまり、民主主義は市場経済なしでは存在できないことを悟り、ソヴィエト圏全体が崩壊し、EUに歩み寄ることになる。そして世界の体制・システムは自由化された。

そして、2006年現在、アメリカは停滞し、ヨーロッパも衰退する一方、アジアが躍進し、1980年～2006年世界におけるアメリカのGDPの割合は21%を維持し、EUは28%→20%に低下。東アジア地域は16%→28%に上昇。アジアは再び市場の中心都市に接近している。日本は市場の中心都市になるチャンスはあったが、経済危機から立ち直った2005年にはすっかり衰弱してしまった。中国は1989年から自国経済の離陸に成功した。世界最大の独裁政権国家である中国は2006年には、産業社会に必要な製品（冷蔵庫、テレビ、洗濯機など）の半分以上を生産している。しかし、中国の人件費はいまだにアメリカの1/20である。

1985年以来、市場民主主義国になったインドも、競争力ある産業部門と世界規模で活躍する企業により高度経済成長している。インドの富の片寄

は中国よりもひどく、既に8万人の大金持ちが存在する。

他のアジア諸国…韓国は自動車産業から通信産業まで全領域で活躍し、特にハイビッド光ファイバーの接続に関連した分野では世界でも卓越している。また、韓国は文化面では、東京をはじめアジア全域の若者たちを熱狂させている。韓国の映画・連続ドラマ・歌手は「韓流」を形成し、西洋の近代性と東洋の伝統的価値を融合させることに成功した社会像を、アジアの若年層にアピールした。

2006年、ラテンアメリカではキューバを除いたすべての国で市場民主主義が機能している。

第14節 アメリカ、終焉の始まり

しかしながら九番目の形式「ロスアンジェルス」、アメリカによる市場の中心都市にも陰りが見え始めている。アメリカの対外債務は膨大に膨れ上がり、1985年のアメリカの対外債務がGDP比8%であったが、2006年には30%以上に達している。更に世界の準備高の2/3はドル建てであるが、2002年以来、ユーロ対ドルで1/3ドルは減価した。

そして以下が2008年9月のリーマンショックから世界を激震へと本格的に陥れた金融危機の本質をアタリが語っている（同著PP.128）。

アメリカの金融システムは増強し、過剰となり、無制限に活動し始め、制御不能に陥った。このシステムは、企業に対してとうてい達成不可能な資本収益性を要求し、産業を担う企業に対して企業活動に必要な投機行為よりも、こうした企業が稼ぐマネーを金融市場に放出することを求めた。結果として、アメリカ製の自動車・家庭用品・テレビ・電話は、世界第一位の座を明け渡す羽目になった。そしてアメリカ企業は、自らの退職者層の重み◆に耐えかね、崩れ去った。

◆退職者層の重み 膨大な人口層であるベビーブーマー世代（団塊世代）の退職金の支払いがかさみ、アメリカの数多くの企業の経営危機を招いている。

一方、アメリカ産業の一部はインターネットによる無償ダウンロードに

より、有償データファイルは無償の1/20ダウンロードされたにすぎない。サラリーマンの債務比率も益々増加し、貯蓄率も世界最低の0.02%（2006年）に低下し、債務返済比率水準50%という状況でも銀行からの融資可能になった。

一方、所得格差が拡大し、アメリカは過去30年程で大金持ち0.01%（主に金融業者）の所得は、平均的労働者の所得の50倍から250倍に拡大し、1990年から2006年までの富創造の半分はアメリカ人世帯1%のみに恩恵をもたらしている。その一方で労働者所得最低時給8ドルであるカリフォルニアでも子供の1/5が貧困生活を送っている。こうした格差は国際規模で益々大きくなってきていて、経済成長が貧困を助長しており、欧米に輸出される廉価な財はアジアやラテンアメリカで最も貧しい国々での厳しい状況により製造されているからである。こうした状況から逃れる為に人々は移動している。また暴力沙汰の内戦もいたるところで起きている。1989年ベルリンの壁崩壊後の2年後、1991年7月にアメリカの新たな同盟国であったイラクはクウェートに侵攻し油田を奪い取ることにアメリカの信任を受けると考えていたが、そうはならなかった。湾岸戦争の時、サウジアラビアの聖なる場所メッカ近辺に軍事基地を設け、イラクにクウェート侵攻断念させた。しかし、アフガニスタンなどでソ連封じ込めのためにアメリカが利用していたスンニ派やシーア派武装勢力が、メッカなどアラブの土地から「異教徒」を追い払うためのテロ行為が続発した。それはソ連に敵対的だったイスラム教の一部の人々が資本主義とアメリカと同盟国を敵視し始めることの始まりであり、2001年9月11日ニューヨークのツインタワーを壊す為、大型ジェット機を乗っ取った。こうしてアタリは過去の市場の中心都市の没落の如く、アメリカと中心都市としての没落を決定づける結果になったことを以下のように述べている。（同著P.113）

こうしてアメリカは、国内の安全対策にかかる費用と、アメリカがこうした事態に対する責任がある敵と見なす外国にいる敵を攻撃するために必要な安全保障上の費用を増額しなくならなくなった。アメリカは、アフガニスタン、次にイラクにおいて終わらなき戦いを開始し、事態は泥沼化した。二〇〇六年、イラク戦争だけでアメリカのGDPの二・

五%にあたる三〇〇〇億ドルの費用を費やした。九番目の形式もまた、「中心都市」の防衛費用がその存続を危うくしたのである。

IV 本書に対する書評と留意点

以上、本書『21世紀の歴史』の要訳・抜粋を御覧頂き読者も気づくことがある筈である。アタリは歴史的に世界を動かしているのは帝国の時代はもとより現代においても一貫して世界の中心となる「都市が」市場による中心都市が始まる前から世界を動かし続けていると考えている。ブルージュ以前の都市国家アテネ、ローマやコルドバなどの帝国の中心都市、ブルージュ以後のブルージュに始まる「市場の中心都市」にも、一貫して言えることは世界中の富や世界中の人を受け入れ貿易する「寛容性」があり、学術・文化などが栄え、世界中の異文化を受け入れる「寛容性」があり、社会全体のイノベーション行う「クリエイター階級」が集うことにより繁栄しているのである。そこが中心となり「周辺都市」は保守化し中心都市の後背地となっていくのである。

本書を読みながら、拙者の脳裏を終始過り続けたのは、偉大すぎる創造的都市論の祖ジェイン・ジェイコブスが、ニューヨークやボローニャなど都市の創造性に着目し、イノベーションを得意とし問題解決能力ある都市を創造的な都市であるというが、本書で創造的都市に該当するのは「市場の中心都市」「市場の中間都市」であり、それらの都市がイノベーション&インプロピゼーションなどにより、都市におけるビジネスモデルを創り、それを後輩地である「周辺都市」に「輸入代替化」としてその都市のビジネスモデルを移植する姿は創造的都市そのものであるといえよう。

またクリエイター階級という語が本書で引用されているが、これを読んだとき、創造的都市における「クリエイティブ・クラス」集積都市政策が都市の創造性を引き出す上で重要であり、都市における多様性の尊重や流動性高く、新しいビジネスや研究を創造し続け都市の問題を解決する一握りの集団であるクリエイティブ・クラスを、アタリのいうクリエイター階級の相関性を感じざるを得ず、彼らは多様性なく衰退途上の都市から素早く過ぎ去り世界中を移動する特性あることも両者共通する見解であると認

識した。フロリダは彼らが「寛容性 (tolerance) ある都市 (創造的都市)」を好む特性があるといい、アタリも本書にてクリエイター階級の特性を同様に扱い、クリエイター階級集積が都市の新しい権力基盤であり、浮き沈み決定するとしている。都市の創造性を引き出す政策と、クリエイター階級による基礎技術応用化が都市発展の鍵であり、そのような都市でないと中心都市になりえない。また、市場の中心都市になるには「港」が重要でありアタリは、フィレンツェは内陸部故、港がなかったために3番目の中心都市になりえなかったという。今日の文脈でいうならば、人や物の交流の中心は、自転車のハブ&スポークでの中心軸「ハブ」として説明される「ハブ空港」「ハブ港湾」を隣接して設置できる都市や国が、市場の中心都市・地域として栄える最低限のインフラ整備条件といえよう。

そして、歴史的に中心都市は、制海権を維持するなど安全保障能力が格段に高く、エネルギー資源への確保やエネルギー革命に対応するイノベーションを行いうる都市や後背地としての国家が、歴史の中で生き残っている必然も、今日「クリーンエネルギー」が注目されている機運と共にエネルギー革命が我が国や国際社会での必須条件であり、中心都市になる上で重要なエネルギー基盤であると言えよう。

そして、それら「新」資源エネルギーの確保や、商業の安全性確保の為の安全保障能力のない都市・国家は必然的に没落していることも一考に値する。

それと忘れてはならないのは、中心都市が没落する要因として、社会全体がコンフリクト状態となり高コスト体質となり「動脈硬化」を起こし、また必ずといって良い程、末期には金融危機が発生し没落していくことである。今回のアメリカ発の金融危機をマクロ社会経済状況からの確に分析し、アメリカに関わらず何度も同じような理由で世界はバブル経済を必然的に創り出しては崩壊させていることを見抜いている点など、アタリの先見の明は何者にも代えがたい「ヨーロッパ最高の知性」であると言えよう。

そして、日本・東京に関して言えば80年代からアメリカ・ロスアンゼルスに代わり世界の中心都市になる機会や能力に恵まれていたのにも関わらずアタリは、「プラザ合意に纏わる円高基調の流れに対し、それを止めるための国際協調力を持ち得なかったこと」「バブル経済崩壊に対処対応能力

が欠如していたこと」「バブル崩壊により現在も日本経済が衰弱していること」「クリエイター階級の育成を怠り、世界中のクリエイター階級を受け入れる寛容性が欠如していたこと」「海運業や海上軍事能力など東アジアにおける安全保障の覇権能力があるのにも関わらず海洋を掌握し、平和の秩序を作り出せなかったこと」「不動産産業などの既存産業保護による超過利得や将来性ある産業育成に関する犠牲を払ってきたこと」「(韓国にある東アジアのハブ港「釜山港」とハブ空港「仁川空港」などのような)本格的な港湾整備と、(ロンドン・シティやニューヨーク・ウォール街などのような)世界的金融市場整備を怠ってきたこと」などが要因となり、東京は市場の中心都市になる機会を自ら逸していることに警鐘促していることが注目すべき点であると言えよう。

そして、アタリは21世紀、日本に課せられた課題を10項目挙げており、「1 東アジアに調和した環境を作り出すこと」「2 共同体意識を呼び起こすこと」「3 独創性の育成」「4 巨大港湾・金融市場の育成」「5 収益性の大幅改善」「6 労働市場の柔軟性を作り出すこと」「7 人口高齢化を補うため移民を受け入れること」「8 市民に新しい知識を公平に授けること」「9 未来のテクノロジーを習得すること」「10 地政学的思考を念入りに構築し、必要となる同盟関係を構築すること」と述べている。しかし現状の日本社会は、国際社会からすると、外国人の受け入れについて閉鎖的であり衰退している印象にうつり、東アジアではむしろ中国、韓国、シンガポールやなどの存在感が高まってきているといえよう。日本は今一度、国全体や各都市が再度仕切り直しをし、世界のクリエイティブを集め、寛容性と多国間協調ある世界や東アジアの纏め役として積極的貢献する態度や環境創りが求められているといえよう。

愛知大学国際問題研究所 指導教授：経済学部 保住敏彦教授
ジャック・アタリ [2008]
『21世紀の歴史 未来の人類から見た世界』 作品社

評者：佐藤 政行

「書評ジャック・アタリ『21世紀の歴史』」は2009年11月、愛知大学国際問題研究所補助研究員として拙者が同左国際問題研究所に寄稿した書評を更に要訳したものである。著者ジャック・アタリは1981年38歳の若さにてミッテラン仏大統領（当時）の補佐官として仕え、1991年ヨーロッパ復興開発銀行初代総裁を歴任し、2006年本書を出版しフランスを始めとするヨーロッパにて非常に鋭い社会分析が多くの人々の目に留まることになる。やがてサルコジ仏大統領（現職）の目に留まりフランス大統領諮問委員会（通称「アタリ委員会」）委員長に就任し、同国未来の為の基本国家政策案の立案に携わることになる。アタリは国家政策家・経済学者・文学者・社会的企業家であり「ヨーロッパ最高の知性」として知られている。

なお本書が世界的に注目浴びる結果となった原因は、2008年9月リーマンショック以降アメリカ発の世界金融危機の発生することを予見し、その構造を中心都市への過剰投機により発生する歴史の必然であることを構造的に分析し、わかりやすく論じたことにある。その上で2035年迄に「第1波 アメリカ帝国の終焉」し、その後「第2波 世界の多極化」「第3波 超帝国の到来」「第4波 超紛争の発生」が相次いで訪れ、2060年頃に「第5波 超民主主義の到来」するという未来への予測を示し、世界に衝撃を与えた。拙者は序文・本文全7章の内、「序文 21世紀の歴史を概観する」「第I章 人類が、市場を発明するまでの長い歴史」「第II章 資本主義は、いかなる歴史を作ってきたのか？」の要訳・抜粋を行った。序文は本文の概要が掲載されており、第I章はノマドとしての人類の歩みの歴史から古代ギリシャ・アテネで萌芽した市場の誕生などから現代にいたるアタリ造語である市場民主主義形成に人類が到るまでの壮大な市場民主主義形成史を記載している。

第II章は、市場の概念を中心とした世界の市場の中心となる都市〔(市場

の) 中心都市) 盛衰の歴史を紹介しており、アタリはこれまで9つの市場の中心都市があったという。それは1200年にブルージュから始まり、ヴェネチア、アントワープ、ジェノヴァ、アムステルダム、ロンドン、ボストン、ニューヨークときて、「オブジェ・ノマド」という小型演算装置…いわゆるIT革命を武器に1980～現在に到るまで市場の中心都市としてアメリカは120年近く世界の中心都市の座を守り続けているという。

そして、それら市場の中心都市のいずれもが、軍事力を持たなかったり、資源エネルギー制約や技術革新の芽を持たなかったり金や石油などの支配権確保による世界の富を強奪されたり、金融危機が弾け経済の求心力が急速に低下すると、創造的な産業の創出主体「クリエーター階級」が次の中心都市へと移動するという。人々の創造性を最大限引き出し、世界中の人々・価値観など寛容性のあり、自由のある所が市場の中心都市になる必然となることを分析しているところは創造的都市論の文脈とも重なり合い興味深い。